

この「高清水通り」が果たして来たそもそもの素顔・役割を探って見る、神仏分離以前のことである。本通りに踏み入れた行者はどこに向かったのかという問いに対して、“本道寺に係った行者は湯殿山のみの篤い信奉者であった、出羽三山参りとは湯殿山だけの参拝、つまり、湯殿山詣であった。“月山經由であって（月山に立ち寄って）も月山は拝まず・拝まないで、湯殿の御宝前のみを拝んだ。“ いわば「高清水通りは湯殿山向け専用道であった。」と謂わんばかりの声がありや否やである。果たしてどうだったのかを少し考察して見る。なお、ここで「両造法論」等に係ることを考察するものではない。

1. 「本道寺口・高清水通り＝湯殿山」の等式に収めたい心情

（1）現存する石碑から

吾が足元にある湯殿山信仰の痕跡を辿って見る。「大黒森プロジェクトの歩みと『ふるさとの宝』ガイドブック一覧表」には、弘法大師掛軸、臥牛の像、弘法大師座像、湯殿山参詣の代参塔、大日如来像を取り上げて、湯殿山信仰との強い結び付けを示唆している。また、同別冊「口之宮湯殿山神社境内の石碑・石仏」には合計96体ほどを掲載し、その中で図-1のような湯殿山供養に直接係るものは64体ほど（約66.6%）を占める。同境内には未調査のものが多数埋もれていると見ており、もっと確認出来るはずである。このように旧本道寺境内には湯殿山参りが主であったとすることを裏付けるものがまだまだ数多くあることだろう。



図-1a

享保十三戊申歳奥羽仙臺牡鹿郡
奉参詣湯殿山御宝前二百度所願成就供養所
七月初八日造立 石巻新田町大行院



図-1b

明和四亥年七月十六日 仁井田村
奉参詣湯殿山御宝前七十八度所願成就所
奥州岩瀬郡長沼領 浄覚院

- ・ 本道寺（寺）および湯殿山は、弘法大師こと空海の開基であること。
- ・ 高清水通りにおいて月山手前から湯殿山向けの直通「横道」をわざわざ開削したこと。
- ・ 上記の石碑・石仏群や代参塔など、湯殿山参詣証拠の記念碑が多数現存していること。

などの状況を以って、「本道寺口・高清水通り＝湯殿山」という構図を当然視するのは妥当なことではある、心情的にはそうなるだろう。しかし、これらを以って「本道寺口（寺も集落も）は湯殿山が全て」とする断定化はまだ早計である。

（2）際立つ代参塔

現口之宮湯殿山神社駐車場に図-2のとおりので代参供養塔がある。「大黒森プロジェクトの歩み」の別

冊「口之宮湯殿山神社境内の石碑・石仏」の冒頭に代参塔群として9基を紹介している。創立年代をみると古いもので1743（寛保三）年、新しいものは1833（天保四、1868-35）年——明治元年は1868年であるから明治より35年前——で、また、90（1833-1743）年ほどの開きがある。これらに直面すると先人の信仰心の篤さに感動し誇らしく思えて来る。



図－2

（3）うれしい悲鳴

図－3は岩鼻通明著「出羽三山信仰の歴史地理学的研究」P34・P35より拝借したもの。「・・・明治十二年の湯殿山各口参詣者数を示したが、これは当時の各口の勢力を客観的に比較出来る唯一の資料である。これによると、本道寺が最多で、羽黒口は大満を含めてもそれに劣る。これは、羽黒および岩根沢では明治初期に参詣の急激な神式化が行なわれ、それに従わなかった参詣者が本道寺口へ回ったもの

表5 湯殿山各口参拝人員(明治12年)

登拝口 月	田麦俣	羽 黒	本道寺	岩根沢	大井沢	大 満 (羽黒口)	烏 川 (肘折)	笹小屋 (大網口)	仙人沢 (大網口)	計
7 / 20～31	478人 1.4%	415 1.2	143 0.4	168 0.5	194 0.6	711 2.1	9 0.0	2 0.0	0	2,120 6.2
8 / 1～10	683 2.0	938 2.8	283 0.8	190 0.6	369 1.1	727 2.1	0	4 0.0	0	3,194 9.4
8 / 11～20	799 2.3	1,531 4.6	1,106 3.2	836 2.5	567 1.7	172 0.5	124 0.4	0	20 0.1	5,155 15.1
8 / 21～30	1,945 5.7	1,913 5.6	4,105 12.0	2,937 8.6	1,051 3.1	208 0.6	139 0.4	5 0.0	15 0.0	12,318 36.1
8 月小計	3,427 10.0	4,382 12.8	5,494 16.1	3,963 11.6	1,987 5.8	1,107 3.2	263 0.8	9 0.0	35 0.1	20,667 60.6
9 / 1～10	815 2.4	568 1.7	2,892 8.5	2,467 7.2	1,194 3.5	108 0.3	106 0.3	10 0.0	0	8,160 23.9
9 / 11～23	809 2.4	259 0.8	1,216 3.6	552 1.6	298 0.9	10 0.0	17 0.0	0	0	3,161 9.3
9 月小計	1,624 4.8	827 2.4	4,108 12.0	3,019 8.9	1,492 4.4	118 0.3	123 0.4	10 0.0	0	11,321 33.2
合 計	5,529 16.2	5,624 16.5	9,745 28.6	7,150 20.9	3,673 10.8	1,936 5.7	395 1.1	21 0.1	35 0.1	34,108 100.0

堀 伝蔵(1978)：『西川町史編集資料6』pp. 170～177の1日ごとの参拝者数を 集計し作成。

図－3

と考えられる。・・・」とある。本の中の一部だが、数表があると客観的な論拠に基づくものだろうと思
い、真っ先に自然と数表に目が行き着く。全体の 20.9%のシェアは第1位だから “ それみたことか、
本道寺口は湯殿山と同値・同相だ ”と胸を張りたくなる。しかし、良く見ると明治十二年のことであ
る、悠久の歴史の一断面に過ぎない。これを以って有史上の本道寺価値を量るのは浅薄というものであ
る。 また、別記したが、本道寺側で、月山山頂の御室・権現堂を経由しないで湯殿山行き直行の「横
道」を開削していたのではないか、それほど、湯殿山に重きを置いたものであり、月山大権現参拝は比
ようもなく低い・軽いものであった、との心情を声高に上げたくなる。

2. 冷静に見ると

(1) 西川町史編集資料 (三) P275～P276 に次の一節「・・・本道寺代参塔は、大井沢大日寺の物
と形式は全く同じである。・・・こうみると代参塔の建立は一時的なものであった。・・・」とある。
そうすると、90 年間に毎年建立された訳でもなく 9 基のみである、これを一時的と見るのか、長い期間
と見るのかは緒論有りだが、旧本道寺開基は大同四 (西暦 809) 年八月八日であるから、1000 年ほど一
明治元年は 1868 年であり、1868-809=1059—の中の 90 年間における 9 基であれば一時的なもの
とする認識は一般的である。

(2) 出羽三山史から

(P28)「元来、修験の教えは一宗一派に偏することなく、広く顕・密・禅の諸宗に渡って能通を義と
する道であったということ。」とある。仏教は、元々は仏陀の教えであり、本来一方に偏頗するとか、人
を何かの目的で区別・差別するという聖典 (正典、教義) は有りようがないのだ。ましてや、わが国で
密教を広め、旧本道寺を開基した空海 (弘法大師) の教えも、偏屈や差別とはまったく相容れない。

(P43) (羽黒山でさえ)「羽黒山は鎌倉時代までは宗派の区別はなかった。」とある。その後の歴史的
経緯はあるものの、宥誉 (天宥) は、湯殿山も本来羽黒山末 (一山の配下) であると主張し、寛永
16(1639)年、江戸幕府寺社奉行に 1 回目の提訴をしたが湯殿側勝訴となったことを踏まえると、この頃
に羽黒側は天台宗に統一しただろうが、逆に言うと、有史以来それまでは、前記のとおり、諸宗入れ乱
れていたということであろう。真言宗を正統とした湯殿山別当 4 ケ寺においても、後記のとおりで、表
向きは真言宗の法流 (諸々の祭儀のしきたり、伝統) に従ったと雖も、行者も先達も精神的な内面・信
仰の面においては崇敬する神仏^{かみほとけ}は多種多様であったということであろう。

(3) 古文書から

西川町史編集資料 第八号 (一) P14 の抜粋を図(表)－4 に取り上げる。ここでの注目は、本道寺の
ことを「月山に至る高清水口」と記述している。つまり、本道寺は湯殿山に至る道とは限定していない
のだ。

(3) 本道寺返答書

出羽国最上白岩領志津村百姓衆訴状指上候ニ付

一、湯殿山参詣道路之儀者、志津村尤右之通り、並ニ月山高清水口申、元来二筋之返路御座候・・・
天和三年亥五月六日

宝蔵坊 梅本坊 本道寺

図(表)－4

第5章に記述したものと重複しない次の古文書、西川町史編集資料 第八号 (三) P140～P141 の抜
粋を図(表)－5 に取り上げる。

6. 本道寺再返答書－寛文六年三月九日（西暦 1666 年）

再返答之條々覚書事 三月十二日於御評定所

・・・湯殿山ハ全く酒井左衛門尉殿之御私領ニ而候。又月山と申者、最上庄内之境目ニ月山権現堂御座候。其御堂之前殿二本之地形より南の方ハ、最上白岩之分ニ御座候而。今程は御領所ニ罷成候。其御堂之内前殿二本之柱より北の方ハ、庄内分ニして尉殿之御私領分ニ御座候。

・・・御堂之鉢守を、社執行と申者白岩之地頭^江永銭拾貫文宛相済候。殊更最上口月山別當は、本道寺^並同村左藤常陸、布施新左衛門と申候而、月山権現之三別當仕候得者、即刻三別當所^江礼義音物調候而、申渡候様者、権現堂之御戸開き仕候条、・・・

図(表)－5

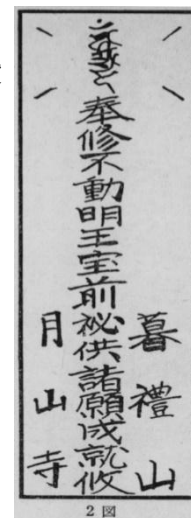
極簡単に言うと、月山山頂にある権現堂の南側半分は、本道寺村の三別當、本道寺・左藤常陸・布施新左衛門の計3者で奉仕している（して来た）と、本道寺は主張したのである。つまり、月山（月山大権現、本地仏は阿弥陀如来）をもきちんと参詣・祭祀の対象にしていたということなのだ。湯殿山参りが最終目的にせよ、月山経由の時は、当然、この月山大権現様にあいさつ参りをしたということだろう。江戸幕府の三奉行所（寺社奉行等）評定所――最高司法機関に差し出した公的文書ですから重いものがある。

切り口を変えるが、六十里越街道にあるような湯殿山碑（後記図－10）は、**本通りには一つも現存していない**。石碑・石塔は本通り沿いにおいては山神碑・虚空蔵山碑と姥像等石碑群があるものの、もちろんそこにもない。同碑の存在は湯殿山信仰の熱心さの象徴だと言われながらも、本通りには一つもない。もちろん、同碑がないから信仰の情熱が希薄であったと断定出来ないのは当然のことである。要は本通りに分け入った人達は湯殿山信仰オンリーの人とは断定出来ないということである。

戸川安章著「出羽三山の絵札」から図－6aと図－6bを取り上げる。後者には「写真 22 稲荷大黒天－本道寺」とあるように図－6a 以外は全て所持者や縁起等の説明を付しているが、図－6a だけは「2 図」とあるだけで本文でも説明していない。

さて、「暮禮山 月山寺」の文字と「不動明王」が目を引く。また、『三山雅集』には、「三上宝殿ヲ暮禮山月山寺と号す。と云う。今は月山とのみ称し、寺号たること知る人無し。・・・暮礼山月山寺と号する所以も夜陰を司る神社なれば三尊来迎の感応も黄昏に及びて礼拝せり・・・」とある。月山大権現の本地・阿弥陀如来――垂迹神（主祭神）を月読命（月弓神）とするのは明治の神仏分離以降なのか？――の御山において、「不動明王」を祀ったお札であるが、羽黒側荒澤寺や湯殿山側のみならず月山山頂御室でも大日如来の化身を崇め祀ったということを証明する貴重なものである。

月山で不動尊というと奇異な感じも受けないでもないが、山頂御室の中に十三仏を安置したことを取り上げる。図－7は「いでは文化記念館」で展示されていたもので、山頂御室に安置されていた実物の十三仏（今は龍澤山善寶寺所蔵）である、阿弥陀如来の周りに祀られていたという説明書きがあった。なお、良く見ると大日如来は中央最上部、もちろん大日化身不動明王も右下を固め、阿弥陀如来も入っている。



図－6a



図－6b



前記のとおり、月山権現堂（御室）の南半分は本道寺の管理下にあった訳だから、また、このようなものを祀っていた訳だから、天台と真言の法流の違いはあったものの、ここを訪れた一般の行者・道者においては、交流は必然的に行われていたことだろう。

3. 懐の深い^{おうよう}鷹揚性と寛容性

長井市史第二巻（近世編）P1003～P1004 に図(表)－8のような面白い記述がある。編集委員の“思い”をマージ（混合）したようにも受けるが、長井市史に記載したものであり個人的・私的な感情は入れずに、何かの古文書に従ったものであろう。客観的な見識であると思うが、それにしても、こうなると、神仏に帰依する姿勢は、先達も大衆も同じ心である。長井は置賜エリアの人だけではなく、もちろん、本道寺宿坊街に集結した講中・道者・行者は同じ人間、みんなにも相通じる心理だったと推察する。

十三仏の配置と法要の対応			
だいにちによらい 大日如来 (十三回忌)			
こくそうぼさつ 虚空蔵菩薩 (三十三回忌)	あしきくによらい 阿閼如来 (七回忌)	あみだによらい 阿弥陀如来 (三周忌)	せいしほさつ 勢至菩薩 (一周忌)
かんぜんのぼさつ 観世音菩薩 (百ヶ日忌)	やくしによらい 薬師如来 (七十七回忌)	みろくぼさつ 弥勒菩薩 (六七日)	じそうぼさつ 地藏菩薩 (五七日)
ふげんぼさつ 普賢菩薩 (四七日)	もんじゃぼさつ 文殊菩薩 (三七日)	しゃかによらい 釈迦如来 (二七日)	ふどうみょうおう 不動明王 (初七日)

図－7

第五章第三節（修験と三山信仰）

近世以来月山・羽黒山・湯殿山の三山を出羽三山と称している。三山の本地仏は、月山は阿弥陀如来、羽黒山は正観音、湯殿山は大日如来とされ、それぞれ三山を羽黒山より順に登拝することによって、羽黒山は現世の利益、月山は来世の成仏を得られ、湯殿山は三山の奥の院として、密厳浄土を拝することが出来ると考えられていた。しかるに江戸初期以降、羽黒山が輪王寺宮の支配に入って天台宗に属することによって、湯殿山の別当である大綱大日坊、注連掛注連寺、大井沢大日寺、本道寺の新義真言宗四ヶ寺との間に、激しい対立を期たすようになっていった。

こうした状況の中で、三山参りは湯殿山の登拝だけで十分であり、羽黒山や月山への登拝などは、未熟者の成すことであるという考え方が、湯殿山の別当寺側を中心に広まるようになり、ついにはこうした考え方が支配的になり、郷土においても三山参りとは、湯殿山だけに参拝するのが慣習となっていた。したがって郷土における三山碑の造立は、湯殿山の石碑を造立することであり、月山・羽黒山・湯殿山の三山を刻した石碑がほとんど見られないのはこのためで、一人で湯殿山に数十回も登拝した旨を刻す石碑も決して少なくはない。しかも、湯殿山に参拝する信者を案内するのは、郷土においてはその大部分が羽黒派の修験であり、黒鴨を^{（黒鴨を）}通って大井沢に抜け、湯殿山四別当の一つである大井沢の大日寺を基地に、湯殿山の宝前に参拝しただけで帰郷するのが例(元の道をまつすぐに帰らないで、大沼の浮島などを参拝して帰るのも少なくなかった)で、羽黒派の修験が本山である羽黒山や月山にも登拝しないで、真言宗である大日寺に宿泊(羽黒山への秋季峰中に登る場合も、行き帰りに同寺で一宿するのが普通であり、羽黒山の在庁修験との交渉以上に、郷土の羽黒修験は大日寺と深いかかわり合いをもっていた)し、湯殿山だけに参拝するという奇妙な事態――在郷の羽黒派の修験が、むしろ進んでこうした風潮を助長するようになった遠因は、三山登拝〈羽黒山の夏の峰〉のために、信者を羽黒山の宿坊〈郷土の場合は御師在庁の薬師院〉まで案内しても、信者を羽黒山中に案内するための御師職を持たない彼等は、信者が峰入りしている間は宿坊でただ待つだけでなく、宿坊では召使い同様にこきつかわれるのが当たり前であるのに対し、湯殿山参拝においては、いかにも信者を先導してきたという彼等の立場が、湯殿山の別当寺側から十二分に尊重されると、何も修験者になる訳でもない一般の信者にとって、

日時も掛かりかつ難所の多い三山登拝よりも、楽に参拝出来かつ神秘的な三山の奥の院とされる湯殿山参拝だけで済まそうという、一種の娯楽性が尊重されるようになったことに外ならない。——をもたらししている。

図(表) - 8

湯殿山詣では、篤い・深い・熱心な信仰心の持ち主だけが、特別な人だけが目指したものではなく、娯楽化していたとする見方である、物見遊山の対象だったという訳である。繰り返すが、こうなると、宗教宗派は関係なくなって、これが一般民衆、大衆の元々の心理である。

また、類似のものがある。第2章の2に記述した西川町史編集資料第八号(二)52頁から53頁より図(表) - 9に抜粋する。

先達には山先達と里先達の二種類あるが、先達は元々修験者であったから坊という名が付けられた。大衆からはこれら先達を修験様と呼ばれていた。しかし、山先達は必ずしも修験の免許を持つ者とは限らず、本道寺自体で一定の講習作法を受けた者を山先達とした。・・・山先達の本質は本道寺より湯殿山に参拝する者(道者)を、途中、安全と心配ないように保護誘導し、兼ねて霊前においては道者の代務として祈念祈祷するのが本務であった・・・

里先達は里にあって湯殿山信仰を広める重要な任務を持ち、この人は必ず修験免許を持っているが、山先達の霞場と違う処は、山先達の霞場は各所に散在しているが、里先達の霞場は所在地のみである。・・・里先達が里から本道寺までを案内する。本道寺から湯殿山まで往復は山先達の担当路である。而論道者参拝に里先達も同行するのが立前である。本道寺は真言宗であるから里先達も又真言宗とは限らないし、天台宗も日蓮宗の先達や浄土宗の先達もあったらしい。(志津石塔坂供養碑より)

本道寺と大日寺も宗派に云々せず自由にしているが、服装は道者姿で、参拝は山先達に依って真言宗形式にし、こうすることに依って参拝者の増加を計って行った。

又里先達は本道寺や大日寺、つまり本山に登録している者もあれば、無登録の者もあって、此の人数を把握する事は出来なかった。

図(表) - 9

もっと端的にいうとまさに里先達は営業マンである、なりふり構わず、あの手この手で口八丁手八丁で、宗教宗派や信仰心の濃淡はともかくも、口説き落として、客集めをして来たのだろう。引き継がれた山先達とて、「必ずしも修験の免許を持つ者とは限らず」とあるとおりである。ただ、山道に立ち入ってからは、山先達は運転手、里先達は必ず随行したかは分らないが、同行したとすれば車掌というべき立場(役割)だったのだろうか。

天台からの三十六道神の寄進・奉納のこと。別記のとおり平泉藤原秀衡公^{ひでひら}の奥様が奉獻・寄進・建立なされた『三十六道神』(銅像・金佛)を取り上げたが、ここである重要な一つに気付いた。藤原秀衡公^{ひでひら}といえば、岩手県平泉中尊寺を中心に奥州藤原氏100年の栄華を築いた藤原三代——清衡^{きよひら}、基衡^{もとひら}ともう一人の秀衡である。その中尊寺・毛越寺は、いうまでもなく天台の総本山延暦寺の第三代座主であつた円仁(慈覚大師)が開山した寺である。したがってもちろん、藤原三代は天台宗に帰依していた。その天台宗の権化たる秀衡公の奥様が、すなわち秀衡公が真言の権化たる本道寺に金佛(銅像)「道祖神」36体も寄進したのである、相当高額だっただろう。それも奥方(女性)自ら本通りに立ち入って、自ら背負って自ら建立したというのである。

寄進した天台の藤原公、受入れた真言の旧本道寺、どちらも寛容度・包容力にして真（誠）に立派ではないか。授受に何の権謀術数があるうか、何の損得勘定があるうか、・・・そんな卑劣・恥辱なことはまったくなかったであろう！ 当時の人達は素晴らしい！ 地元の今はどう思う？

4. 民衆の^{さんやま}三山信仰の証

図－10aは旧湯殿山ホテル敷地にある湯殿山単独碑、同図bは山形市上桜田地区「(宗) 月山神社」境内にある湯殿山中央の三山碑、同図cはネットのウィキペディア掲載、東漸寺（東京都習志野市津田沼）にある、同図dは三島神社（横浜市栄区飯島町）にある三山碑である。確かに、出羽三山神社の宮司を歴任された阿部良春氏はその著書「出羽三山の信仰と伝統」の中で「全国各地に現存する出羽三山信仰碑の殆どは“湯殿”をその中心に刻字し、向かって右に月山、左に羽黒山が刻まれ、しかも中央の湯殿山は一段と大きくなっている」と話されているが、そのとおりに言える面は確かにある。しかし、図－10cのような『月山』中央の三山碑もある、ただし、これは近年（明治以降？）のものと言われているが。



図－10a



図－10b



図－10c



図－10d

次頁図(表)－11は、「西川町史 上巻」より転用したものである、同表において、「うち三山碑」は図－10b・cのような碑であり、合計からその分を差し引いた数は殆どが図－10aのような「湯殿山」単独碑であると読める。なお、全てを網羅した完全な数量把握ではなく概数であると注釈されている。同表においては明瞭な特徴が表れており、山形県内と近隣県では三山碑が殆どない、つまり、逆に殆どが

「湯殿山」単独碑であり、ところが、遠県では「三山碑」が多いのである。^{おやま}御山の近くに住む人々は、三山の状況について見聞きを含めてよく把握しているが故に、湯殿山（御宝前）信仰に傾倒しより深くなるということであろうか。揶揄すれば、麓から一番目立ち標高の高い月山や出羽三山中核の霊地御本社がある羽黒山は、威張れなかったのである。麓からはまったく見えない湯殿山の御利益が如何に絶大だったのか、そう思った人間を写して（重ねて）いるようである。他方、一生に一度くらいしか来られない他県の人々は、三山全部のご利益を^{こうむ}蒙りたくなる、という欲張りな心理なのなのだろう。職業目線や学問的視点からはこのような言い方はしないだろうが。

「貞治七年阿弥陀板碑」のこと、山形県「山形の宝」データベースより、図(表)－12に転記したものである。1368年のもので、655(2023-1368)年も前に建立されたものである。往古は、里の行人結集においては月山を目指したのである。山形側から見れば、地の利として、寒河江→白岩→西川に入り、岩根沢口・あるいは本道寺口から入っただろうから、第一義的には湯殿山では無く月山だったのである。

表5 出羽三山碑の分布

年号 県		天文以前(一七四一)	寛保(一七四一～四四)	延享(一七四四～四八)	寛延(一七四八～五二)	宝暦(一七五一～六四)	明和(一七六四～七二)	安永(一七七二～八二)	天明(一七八一～八九)	寛政(一七八九～一八〇二)	享和(一八〇一～四)	文化(一八〇四～一八)	文政(一八一八～三〇)	天保(一八三〇～四四)	弘化(一八四四～四八)	嘉永(一八四八～五四)	安政(一八五四～六〇)	万延(一八六〇～六一)	文久(一八六一～六四)	元治(一八六四～六五)	慶応(一八六五～六八)	明治(一八六八～九二)	大正(一九一二～二六)	昭和(一九二六～八九)	合 計	うち三山碑	パーセント	
		青 森	秋 田	岩 手	宮 城	福 島	山 形	庄内	最上	村山	置賜	新 潟	栃 木	茨 城	群 馬	千 葉	東 京	埼 玉	神奈川									
															1	1	1				1	7	2	2	15	14	93.3	
		1						1	2		1			2	4			2		3			1			17	10	58.8
								3		1	2	1	15	7	10		6	6	1	5		1	32	11	5	106	70	66.0
		1				1	1			2		12	10	4	2	7	3		5	1	3	15	3	1	71	5	7.0	
							1	1	3	1		3	8	4	2	6	4	1	5			7	4		50	4	8.0	
山 形	庄内					1				2		9	23	8		6	6		5		6	17	3		86	7	8.1	
	最上											4	3		2	1	2	1	1	2		3	2		21	1	4.8	
	村山			1		2	5	5	6	32	7	37	27	22	6	18	4	1	3	1	3	5	1	1	187	3	1.6	
	置賜					2	1	1		7	1	31	31	17	4	16	5	2	4		2	26	1		151	2	1.3	
												2	3	2	1	5	1		1		2	4	2	1	24	0	0	
		3	1		1	1	1	4	1	3	2	11	2	7		5	3	1			5	3	1		55	1	1.8	
		2							1			3	1	2	3						1	3		3	19	16	84.2	
														4		1	1	1							7	7	100.0	
		3				4	1	3	4	7	3	4		9	2	9	7		3	1	1	18	11	38	128	122	95.3	
					1	1		1				1		2			1			1	1	2			11	10	90.9	
						1		1		2		4	3	5	1	2						1			20	17	85.0	
								2	1	3	2	3							1			1			13	11	84.6	

図(表)－11



山形市山家町の通称「糠塚」という細長い土壇状の塚（高さ約3m程度）の上に立っている、南北朝期の北朝年号貞治7（1368）年の年号が刻まれている板碑。高さ1.3m、上部幅44cm、下部幅42cm、厚さ30cmの柱状である。正面上部に直径37cmの円い二重円線を配し、その中にキリク（阿弥陀）の種子を刻み、その向かって右にサ（観音）、左にサク（勢至）の種子を並べて置く。その下方に

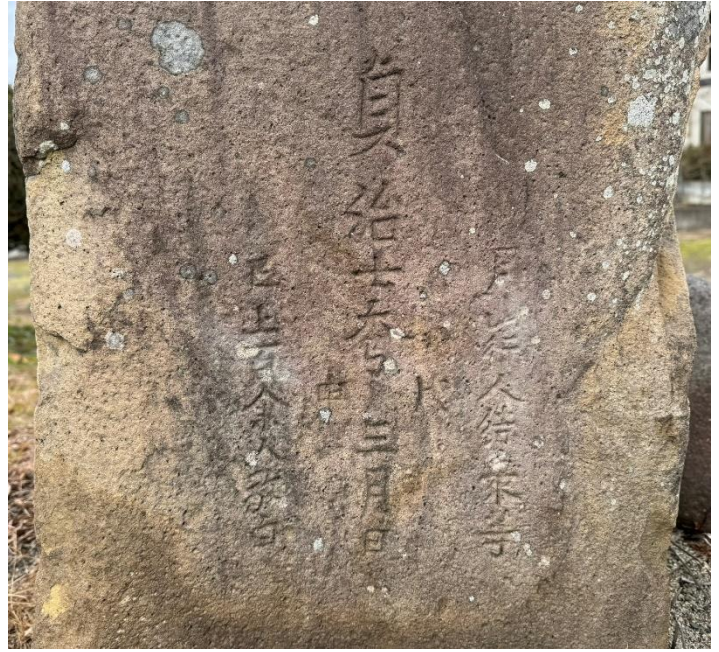
月山行人結衆等

貞治七季（年）戊申三月日

已上百余人敬白

の銘文が刻まれている。

この場所には昔、一明院という修験寺院があったとされ、五輪塔や小石仏が立つ。行人が結集し月山登拝した最古の例として貴重である。



図(表)－12

旧本道寺は平安時代前期、大同四（西暦 809）年に寺号を「月光山光明院」として弘法大師空海が開基したとされるが、――何かの本に、湯殿山が今様の赤茶けた御宝前になったのは江戸時代になってからで、人為的な造成・細工によるものではないか、とする記憶がある。――それ以降の鎌倉・南北朝・室町・戦国・安土桃山の時代は月山が主、湯殿山は従ではなかったのか。同図右写真は 2023(R5)年 12 月 21 日（木）午後撮影したものだが、梵字は黄砂の影響だと思うが、砂が窪みにこびりついて刻字の明瞭度が落ちて来ている状態にあった。



図－13

図－13、ところで、当碑に向き合うとその視線先は真北方向である、碑は“北を背に南面ス”という状態に安置されている、これ「^{さじょううげ}左上右下思想」の根源に係り、かつ、本地仏を妙見菩薩とする北極星（北辰）信仰とも密接に関連していると思う。他方で月山はほぼ真正な北西の方角である。このような位置に配置したのには訳があるのではないのか。この位置からする月山の方角は陰陽道の天門・神門に当るが、ここでは詳細には触れないことにする。

以上のようなことから、六十里越街道から出羽三山に入った行者・道者は、ほとんどが湯殿山行きで月山行きは殆んど無かったとするのは早計である、開山有史以来の歴史をすべて網羅してから主張すべきではないのかと思う。

5. 隔てなく寿ぐ神仏崇敬心

切り口をちょっとした芸能的側面から探って見る。次頁以降に記述する法楽の面と合わせて見る。

内藤正敏著「修験道の精神宇宙」(青弓社)によると、「・・・ 湯殿山表口の寺院に湯殿山法楽が伝わって来た、羽黒修験にも湯殿山法楽とほとんど同じ節で出羽三山の神仏を読み上げる「三山祝言」が伝えられており、その後半部分の神仏名は、羽黒山荒沢寺の『三山勤行作法』によると、次頁㉔のようになっている、とある。また、次頁㉕・㉖は山内志朗編「本道寺世代記 考案(稿)」より拝借したものである。㉗は長井市史(二) P1005 より引用した。

導入部は棒読み、その後は節を付けて慰めの気持ち、廻向の心を傾けるという。なお、法楽(声^{しょうみょう}明も同類か?)とは仏の教えを信受する喜びを表す振る舞い、法会・神事^{ほうえ}の催しにおいて、音楽を奏で神仏を読み上げて供養する祭儀をいう。また、趣旨を考えるに、八百万の神迎え・神降しの祭文であろうと思う。

これらを参考に、羽黒側、湯殿側でどのような神仏を崇めて来たかを確認して見る。

㉔～羽黒側においても、湯殿山の神仏を崇めている証拠である。

㉕～湯殿側(真言)の注連寺は、羽黒側には一切関知しない態度? いや「日本大小の神祇^{じんぎ}」と全てを崇めている。

㉖・㉗～湯殿側においても、羽黒山・月山の神仏を崇めている証拠である。

特に㉗「日本諸神諸仏諸大権現諸菩薩」と、あらゆる神仏を分け隔てなく崇め奉るという姿勢である。

これらの法楽がいつ頃出来たのかは不明であるが、一時期宗派對立はあったものの羽黒側も湯殿側も、互いに相手の祭神・本尊を崇め祀って来たという一面もあったということだろう。㉔㉕㉖に登場する「日月燈明仏」は、仏陀が生まれる前の遠い昔の昔に正法を説かれた仏をいう。

現在の社会にあっても、宗教法人法に基づき依って立つ神社と寺院の区別をするが、別物のように扱うのは当該従事者・職業人であって、一般人・大衆・民衆の大多数からすれば、祭神が何なのか、本尊が何なのかは問題ではない。宗派の何たるかを勉強・研修し事前に納得・自覚してから、厳密に仕分けしてから赴くというものではない。これと同じようなものだろう。さらには、一般人の日常においては、羽黒山信仰に篤い人達もいただろうから、当然集落においては人的交流と共に情報交換が行われるのは今も昔もまったく変わらない。

前記図(表)－8の内容についてあらためて振り返ると、最終的に湯殿山を目指したものの、道中その心を探れば物見遊山^{ゆさん}(気晴らしにあちらこちらを見物すること。)的というのは十分に想像・理解出来る。羽黒側と湯殿側の人的交流に大きな渦があったということだろう。つまりは、身体行動として湯殿山御宝前を目指したということには口を挟む余地はないが、精神的には真言宗に全面帰依したとは到底云い切れない。これは案内された受け身的な道者のみならず、先達もそうだったろう。本道寺・本通りに係った、分け入った人達はその身分・立場に関係なく、月山はもちろん、羽黒山にも興味・関心はみな持っていたことだろう。双方の法流に関しても情報交換はあったことだろう。人間は「心・言・行」——「心(認識や精神)・言(言葉や言語)・行(行動や活動)」—— 一体で生命活動を成していることから、一部だけを切り出して、その人の全人格を、あるいは人の集団・組織、地域の全体を評価することは浅薄、不可というものだと考える。

A 羽黒山荒沢寺の『三山勤行作法』	南無皈命頂礼慚愧懺悔六根罪障 きみよう おしめに らいはいてす 御注連八大金剛童子一時礼拝敬曰	赤坂薬師瑠璃光如来 上品上生阿弥陀如来 三十三体正観音 弘川大聖不動明王 ぐんだり 軍荼利妙見正観音 開山能除大師 羽黒山大権現 東照大権現 吹越開山能除大師 荒沢大聖不動明王 荒沢地藏大菩薩 小月山大満虚空蔵菩薩 狩籠新山大権現 御田ヶ原無量寿仏 補陀落山大権現 御浜弁財天 濁沢大聖不動明王 仏水池三十六童子 行者八大金剛童子 御峯十万八千仏 月山大権現 御裏三宝荒神 鍛冶屋敷稻荷大明神 湯殿山大権現 御裏三宝大荒神 御瀧大聖不動明王 御沢萬八千仏 梵天帝釈両部大日大龍権現 (手向 薬師堂 現・薬師神社) (手向 元黄金堂境内の阿弥陀堂現在なし) (手向 黄金堂内) (羽黒山 参道元カンマンノ瀧 現・須賀瀧) (羽黒山 参道元五重塔の本尊・羽黒三所大権現) (羽黒山頂 開山堂 現・蜂子神社) (羽黒山頂 本社 現・三神合祭殿) (羽黒山頂 東照宮) (吹越 吹越開山堂 現・吹越神社) (荒沢 荒沢寺境内) (荒沢 荒沢寺境内) (月山二合目 大満) (月山五合目 狩籠) (月山八合目 弥陀ヶ原) (月山八合目より下る秘所 東補陀落) (東補陀近くの秘所 御浜) (御浜近くの秘所 濁沢) (月山九合目 仏水池) (月山九合目附近 行者戻し) (月山山頂から分れ出る八本の峰に住む十万八千の仏) (月山山頂 御室 現・月山神社本宮) (月山山頂 御室) (月山山頂 鍛冶小屋) (湯殿山御宝前 現・湯殿山神社本宮) (湯殿山御宝前 現・湯殿山神社本宮) (湯殿山仙人沢 御沢仏) (湯殿山仙人沢 御沢仏) (湯殿山仙人沢 御沢仏) (湯殿山仙人沢 御沢仏) (湯殿山仙人沢 御沢仏) 湯殿山
--	--	--

	(B)湯殿山大権現法楽法則(注連寺)	(C)湯殿山大権現法楽法則(大日坊)
	南無帰命頂礼湯殿山大権現慚愧懺悔六根罪障滅除煩悩滅除業障 （しんしょう） 御注連八大金剛童子 御裏ニ三宝荒神 水神権現 御前五身仏 御流釈迦文殊普賢菩薩 天照大神 仏生池大聖無量寿仏 御滝大聖不動明王 愛染明王 飯縄ノ権現 飯ノ山白衣ノ権現 青面金剛童子 熊野権現 胎内権現 <u>日月燈明仏</u> 御蔵ニ大黒弁財天 御沢ニ八万八千仏 梵天神〔帝〕釈両部大曰大霊権現 十三仏 血ノ池権現 御釜権現 優婆権現 薬師ノ権現 仙人権現 剣ノ権現 護身仏 大網注連掛両部ノ大曰大霊権現 御山権現〔聖観世音菩薩〕 即身仏 当国当所鎮守 日本大小の神祇 御注連八大金剛童子	南無帰命頂礼湯殿山大権現慚愧懺悔六根罪障滅除煩悩滅除業障 （しんしょう） 除業障御注連八大金剛童子 御裏ニ三宝荒神 水神権現 御前五身仏 御流釈迦文殊普賢菩薩 天照大神（テンシヨウダイジン） 仏生池大聖無量寿仏（フスイケダイシヨウムリョウジュブツ） 御滝大聖不動明王（オタキハダイシヨウ・・・） 愛染明王 飯綱ノ権現 飯ノ山白衣ノ権現 青面金剛童子 熊野権現 胎内権現 <u>日月燈明仏</u> 御蔵ニ大黒弁財天 御沢ニ八万八千仏 梵天神〔帝〕釈両部大曰大霊権現（ボンテンタテシヤク・・・） 十三仏 血ノ池権現 御釜ノ権現 優婆権現 薬師ノ権現 仙人権現 剣ノ権現 護身仏 七滝大聖不動明王 大網両部ノ大曰大霊権現 子安地藏菩薩 波分大聖不動明王 即身仏 当山鎮守弁財天 御山ノ開山弘法大師 大慈大悲ノ 月山権現 羽黒三所ノ権現 総山権現

南無帰命頂礼湯殿山大権現慚懺悔六根罪障滅除煩惱滅除業障なまむ
南无帰命頂礼慚懺懺悔六根罪障御注迎八大金剛童子一時礼拝

御裏三宝荒神

御前補陀落梵天帝釈両部大日大霊権現

天照大神日月燈明仏

御瀧大聖不動明王

五身仏

愛染明王青面金剛童子

御蔵大黒弁財天

御沢二八万八千仏

御峯十万八千仏

剣之権現

胎内権現

地獄天上十三仏

水神権現

カンマン大聖不動明王

月光仏

姥神

仙人権現

薬師沢十二神将

川上地藏薩

大慈大悲月山権現

弥陀原無量寿仏

大満虚空蔵菩薩

三怙大師遍照如来

荒沢大聖不動明王

荒沢地藏権現

出羽鎮座正一位羽黒山大権現

開山照見大菩薩

阿古屋権現

熊野日本第一大霊権現根本熊野ゆや三所権現四所明神五大王子眷属
心中諸願皆令満足哀愍納受
一時礼拝

羽黒山～月山

神変大菩薩

大師遍照金剛

弘川八大金剛童子

清川五所之王子

鳥川八大金剛虚子

東方降三世夜叉明王

南方軍荼利夜叉明王

西方大威徳夜叉明王

北方金剛夜叉明王

川下四十八滝大明神

注連掛深山権現

大網大日如来

御清水大日大聖不動明王

大井沢地藏権現

葉山月山両大権現

当所鎮守正一位五所大明神

稻荷大明神

三洎惣宮大明神

薬師如来十一面観世音

八幡宮

明神宮

滝之沢大聖不動明王

日月灯明仏

十二神将

山之神

龍神水神道陸神

日本諸神諸仏諸大権現諸菩薩

御注連八大金剛童子諸願成就皆令満足哀愍納受一
時礼拝

神職・法職の職業人——往時の修験者・山伏や先達、宿坊の^{あるじ}主は、宗派・教義の何たるやを熱く語った、情熱的に説教したであろうが、参詣者一般人大方の神仏（神社仏閣）に向き合う素直な思い（内心）は、昔も今も次のような詩の心にあると思う。

・西行（天台から真言宗帰依）が伊勢神宮に参拝した際に詠んだ歌である。

「 なにごとの おはしますかは しらねども かたじけなさに なみだこぼるる 」

・貞明皇后(大正天皇の皇后)が詠んだお歌である。

「 きりすとも^{キリスト} 釈迦も孔子も うやまひて をろがむ神の 道ぞたふとき 」

・江戸時代の長州藩士・村田清風が詠んだ歌である。

「 来て見れば 聞くより低し 富士の山 釈迦も孔子も かくやあるらん 」

神仏だけではなく、何事も有り難いと思えば、真実に触れれば、至誠の人物に逢えば、^{こうべ}頭は自然とうなだれるものだ。このような人達が出羽三山を目指したということだろう。

6. 昔も今もお互い様

“お互い様”と融和的に書いたが、熾烈な争いがあったとする記述がある。岩鼻通明著「出羽三山信仰の歴史地理学的研究」（名著出版）P26～P27にある内容の一部を図(表)－14に拝借する。

・・・一方、岩根沢は、本道寺と距離的に近接しており、しかも真言宗の湯殿山4ヶ寺（本道寺、大日寺、大綱両寺）に対し、天台宗の羽黒山系であったため、本道寺との勢力争いは熾烈であった。・・・岩根沢も近世後期には本道寺に対抗しつつ勢力圏を拡張させたため、各坊間の旦那場はかなり錯綜したものとなっている。

図(表)－14

（1）本道寺と岩根沢の对待

^{（前）}別記第14章図(表)－5中段にある「岩根沢より湯殿山参詣之直路を^{切り開いたことから}切開候得共、本道寺より^{たびたび、止めるようにはっきりと告げたところ}度々相留堀切候而」——寛永十六（1639）年頃のとおり、岩根沢旧日月寺において、本道寺権益下の横道に直結道路を開削したことを、本道寺側が日月寺側を問題視した。

^{（後）}他方で、別記第10章図(表)－4に係る内容——寛政九(1797)年頃のとおり、本道寺側において、旧日月寺の権益下にある不動滝への参詣道を無断開削したことから、日月寺側が本道寺側を問題視した。

つまり、前者と後者は立場が逆転したのだ。

（2）本道寺と志津の对待

また、図(表)－15は西川町史編集資料 第八号（一）より、9頁～「(五) 高清水通り一件訴訟－天和^{ママ}3（1683）年二月」の解説の一部を抜粋する。本道寺返答書の一部を記述したものだが、ごく簡単に要約すると、本道寺が高清水通りに月山・湯殿山への参拝行者を案内することは、志津村にとって六十里越街道経由の行者が減ることから、すなわち、収入が減ることになって困るので、そのような事業を中止するように幕府の評定所に訴上したことに係る内容である。それに対して、本道寺側は必要な年貢を払っており、我々の参詣に係る諸事業は公認された周知の事実であって、志津村から反対される筋合いはないと主張している。本道寺と旧本道寺門前集落とも言われた志津との間でも客の引き合いで揉め事があったのだ。

・・・高清水口は古来から月山・湯殿山の遍路であって、此の道の別当佐藤常陸・布施新左衛門が月山を、本道寺は月山・湯殿山の二つを相勤め、拾六年以前（寛文八年・1688年）までは、年貢として兩人より永銭四百文、寺より同九百文を上納している。志津村では七拾年来荒廃したと申立てているが、全くの偽りである。

且又、この道には旧跡が立ち、御領・私領の先達共が毎年掃除や普請をしていると、高清水通りの今昔を述べ、志津村衆より彼此と言われる道理はない。・・・

図(表)－15

（３）岩根沢の寛容性

別記した第10章図(表)－4中の一節に「・・・内済ニ相済可申候へ・・・」とあり、簡約すれば「願わくば、表ざたにせず 物事が平和裏に収まるように考えている。」ということだから、神仏に帰依する隣同士、余り刺々しく事を荒立てないで穏便に収めたいという意図の表れであろう。

旧日月寺（岩根沢三山神社）の由緒・縁起についてここでは深入りはしないが、ホームページには、「嘉禄2年（1226）大和の国より行脚に来ていた僧が岩根沢に投宿、発心し一字を建立、役の行者（役小角）の威力も加わり月山に道を切り開く。その後、・・・寺号を日月寺と称し天台宗派に属した。」とある。「日月寺」とした原初の根拠には触れていないが、「日」を頭に付け、すなわち太陽を——神格化したのが大日如来であり、湯殿山に繋がる——崇め祀る姿勢をきちんと表している。月山に道を切り開くというものの命名した初源を辿れば、相待（対）する日と月の一方の日（陽）を排撃したのではなく、両方を同等に神格化・尊崇したのだろう。

（４）ほどほどにせめぎ合う人間模様

以上に鑑みて、本道寺は岩根沢と志津の間で、責めたり責められたりと、お互い様という処、人間の悲喜こもごもの投影物語であった。周辺地域を巻き込んで来た高清水通りと本道寺はセット、高清水通りは本道寺があつての存在価値、本道寺は高清水通りがあつての存在価値、そして、隣接する岩根沢と志津の間で綱引きがあつて、相互補完的に発展して来たということだろう。立場や思いの異なる人々が複層的に交錯した大きな舞台であり、真言特化エリアではなかった、一時期そのように見られることはあったにせよ、時代の変遷・大きなうねりの中では、陰陽は「陰中陽あり、陽中陰あり」の世界——阿吽の調和の世界、押したり、押されたりということである。

（５）お互い様を別視点から

図－16は羽黒山荒澤寺境内にある石塔・石碑の一部である。羽黒側（正善院黄金堂、瀧水寺五重塔、寂光寺御本社、荒澤寺地蔵堂）が天台宗であろうがあるまいが、湯殿山は出羽三山総奥の院として崇め祀って来た証の一端である。湯殿山は、南域真言4か寺は空海が開基したといい、北域羽黒山は能除仙（蜂子皇子・照見大菩薩）が開基したという、真実は一つなのに異界の二つが併存していたのである。



図-16a



図-16b



図-16c

羽黒山	湯殿山	月山
□	□	□

図-12d

7. 原点に立ち返る

まず、山内志朗編「本道寺世代記 考案（稿）」四頁に図(表)－17の一節がある。

・・・これは即ち浄土口に表裏の二口ありと雖も、大師当山の口を以って日参したもう最初の道なる故に（当時より今に至るまで日参あり。大師の運命を守り即ち代参なり）参詣の道の本なり。これ即ち本道なり。

因りて本道寺と号し、初めト居^{??}の地を尋ねたまう時、月光の如く光明顕れたるを以って月光山光明院と名づく。・・・

図(表)－17

本件命題の纏めに当っては、本通りは旧本道寺あってこそその存在意義から開く必要がある。大同四（西暦 809）年に弘法大師空海が開基し寺号を「月光山光明院」と名付けた、その後、天長 3（西暦 827）年に湯殿山大権現を勧請して「月光山本道寺」と改号したという歴史に鑑みて、次のような考察に至る。山号は『月光山』で共通的で変わらない、開基当時の寺院名は『光明院』である、後の寺院名は『本道寺』である。月は太陰の月、すなわち月読命・月山に通じる。光は言うまでもなく太陽のことであり、太陽神（大日神）に起源を持つ大日如来・湯殿山に通じる。『明』は日と月、すなわち、湯殿山と月山に通じる。本道寺の『本』は元・源の意であり、密教根本仏である大日如来は、何かを区別・差別・分別する、他と比較して優劣を判定するなどとはまったく無縁な仏である。山内志朗さんの表現も素晴らしいと思う、“月光の如く光明顕れたる”であるから、まずは月を立てている、太陽が威張って月をオレが照らしているのだ、俺があつての君だ“なんて微塵もない。

真言宗の開祖なる空海は弘法大師の聖地、高野山のことに触れる、図－18（大沼の写真）を参照のこと。入口の一の橋から弘法大師の御廟がある奥之院までの 2km ほどの参道には、20 万基を超える墓碑や供養塔、慰霊碑が並び立っている。江戸期の諸大名がこぞって高野山に墓石を建て、結果して大名家の墓は 110 家にも及ぶそうである、圧巻、ただただ圧倒される。宗教宗派や身分制度（士農工商、皇



図－18

族、貴族、大名、一般庶民）や生前の所業や敵味方を超えて寄進・奉納して来たものである。それら総ての人々を等しく受け入れる高野山の懐の深さがここに明確に表現されているのだ。これは今に生きる大師の光徳である。そのような大師（空海）が本道寺を開基したのである。身分制度が明確であった江戸時代においては、財政豊かな組織や金のある個人が建立・寄進したものであって、農民以下の一般民衆は出来なかったと言いたくならう。しかし、講中や無^{むじん}尽、無^{たのもしこう}尽講、頼母子講などを組んで、一つの束となって金を工面して建立したものもあるのではないかと推測している。

本道寺を開基したお大師の絶対公平・絶対慈愛・無量無限、広大無辺の教えに素直に向き合う必要がある。人間の命名は、健やかな成長と大人物になることの希望と期待を込めての名付けだろう、同じ様に神^{かみほとけ}仏・神社寺院には、子孫繁栄・五穀豊穡の与楽発揚のご神徳を期待して山号・寺院名を付けたのだから相応の偉大な意味を持っていることになる。また、大師開創の真言密教に鑑みて、湯殿山開基も踏まえて、そのような大師の心を思いに馳せれば、一つに偏見・偏^{へん}頗^ぽする、独善化するなどいうことは、大師は最も嫌う処、拒絶するだろう、お怒りになるだろう。月山・湯殿山のどちらかを目指した人数の一時の多少を以って、総括的にどちらかの専用道だ、どちらかのみを目指したのだと観る・断定するのは安直・浅薄な見方である。そうでないならば広範な時代の年数と人数の多寡について、精緻な客観的データ（数値）を開陳披瀝し、相対比較、客観的根拠を以って論ずるべきものである。

空海は、自らの御影^{みえい}とライバル最澄の御影を並べておき、踏み絵を迫って人を選別したか、そんな訳はないのだ。

一時期、大方の最終目的地は湯殿山であっても、神仏崇敬に向き合う人間の深層心理は交錯・複層しており、本道寺の全てが湯殿山とは言い切れない。狭隘な個人的見解としては“見倣し”はあるかもしれないが。修験道・山伏道は、密教（仏教）・道教・神道が混淆したものだと言われるとおり、何かの宗派に偏り、固執し、他を排斥するものではないはずだ。もちろん、ある一時代、本道寺宿坊宿泊者の大方は、あるいは、高清水通りに分け入った参詣者は、湯殿山のみを目指した時期があったというのであれば何も格別問題視するものではない。

出羽三山神社発行「出羽三山史（平成23年3月十版）」P2～P3の一部を図(表)－19に抜粋する。今の出羽三山神社、そして神仏習合の時代からも羽黒側においては、出羽三山は蜂子皇子（能除仙、照見大菩薩）が開基したというのが建前である。ところが、同社監修の公式の歴史書にはこのとおり、冒頭部に、弘法大師（空海）がまずは湯殿山の存在を認め、次いで羽黒山の、次に湯殿山の開山に係ったと記述している。もちろん、伝説といいながらも・・・この同社の寛容度に驚くばかりである、立派な見識ではないか。

第二 神の山、三山

－・・・古来、出羽三山は人々の近付き得ない神秘の霊域として幾多の伝説を秘めている。

昔はるばる出羽国に下向した弘法大師は、月山に源を発し、湯殿山の御宝前を巡って流れて来る梵字川のほとりを歩いていると、川に両部の真言が流れているのを御感得になって「さては、水上に大日如来がましますのではなからうか」と、この流れをさかのぼり、湯殿権現の宝前に真近くなると、火の雨が降ってどうしても先に歩を進めることが出来なかった。大師はそこで近くの岩窟に十七日の参籠をしたところ、その満願の日の暁に一人の老翁が現われて、「権現を拝せんとするならば、もとの道を引返し、羽黒にまいり修行を遂げよ」と論され、遂に羽黒山で再び十七日の修行を遂げ、羽黒権現の御導きのまにまに七五三の注連を掛け、羽黒の常火を受けて、遂に湯殿権現に謁する事が出来た事を伝え、異常なる靈験を体得した聖者でなければ、容易に登拝する事の叶わなかった古い信仰の姿を語っている。このような伝承は、三山をめぐる各登拝口に色々な形で残って挙げ得ない程である。この三山は、山そのものが神であり、又神のお住居として捧げられた領域であったから、神聖この上もなく、山中の一木一草といえども神々のものであり、これに手を触れたり、又猥(みだりに)りに近付いてはならない禁忌の区域であった。・・・－

図(表)－19

高清水通りから視野を広げて出羽三山を俯瞰する。天台と真言の一時期な対立はあったにせよ今世に繋げば、それはすなわち切磋琢磨・相補関係学びの舞台であり、対等互啓(恵)の精神を育む寛容豊かな多様性社会の縮図とも理解出来る。総括すれば、「高清水通り」はどちらかに偏った専用道ではなかった、月山と湯殿山を、もっと広く羽黒山をも目指す行者の往来を誘導・案内したとても大らかな広大無辺の修験の道——人間修養の道なのであった、昔も今も変わらない。「木を見て森を見ず」と揶揄されないよう自戒している。

<end>